

資料紹介

— 開高健 『日本三文オペラ』 関連記事

三重野 ゆか

『日本三文オペラ』は、『文学界』に昭和三十四年一月から七月まで七回にわたって連載された。『日本三文オペラ』執筆当時を開高は、次のように回想している。

去年の夏頃、ぼくはくたびれきっていたことがあって、その憂鬱から逃げるために、関西方面に旅行をした。たまたまその旅先で、この集落（引用者注・作品における「アパッチ部落」）のひとびとのことを耳にして、なんということなく調べはじめた…（「大阪のアパッチ族」／『日本読者新聞』昭34・6・8）

開高の文壇デビュー作である『パニック』が当時の新聞記事に題材を得て執筆されたことは、向井敏氏などによって詳細に検討されている。^(註) 社会的事件に着想を得て作品の構想を立てる開高の手法が『日本三文オペラ』でも用いられた経緯が、ここでは語られている。しかし、従来の論考

においては、開高が執筆に際して参照とした新聞記事の存在は明らかにはされてこなかった。

以下に紹介する記事と『日本三文オペラ』を詳細に照会した場合、記事に紹介されたエピソードをほぼ忠実に作品に取り入れているばかりか、記事の引用とさえ思われる文章も見られる。第一章の三、第三章の二、第五章の二・四、および終章の一・二などがそれである。今回は紙面の都合上、詳細に検討することはできなかったが、この点については別稿で改めて論じてみたいと考えている。

『朝日新聞（大阪版）』昭和33年7月31日（夕刊）4版・5面

アパッチ族

—— 上 ——

絶えぬ死の悲劇 ☆ ☆ ☆ シルバー・ラッシュに踊る

☆ ☆ ☆
いつごろ、だれがつけたのか、人よんでアパッチ族。つわものどもの夢のあと、三十五万坪の旧陸軍造兵廠跡を

かせぎ場として、生きていた人たちのことだ。大阪城の天守閣のすぐ東、爆撃の廃墟に残る「グズ鉄さしがしは、さながら西部劇。警察官とアパッチ族が追いつ、追われつ、盛衰はあつても、この八月でまる十三年。やっばり戦争の傷跡はまだ消えていない!。

☆ ☆ ☆

○：赤さびた鉄骨だけがボウボウとしげる夏草の間からぬつとつき出て、白昼でも薄気味が悪いのに「ギイツ、ギイツ……」金ノコのいやな金属音―鉄骨だけの屋根に黒くうごめく人影四つ……それを囲んでジリジリと迫る警察隊、だがつぎの瞬間気づかれたと知ったアパッチ四人組は暗に吸い込まれるように平野川へ、水音だけを残してつぎつぎに消えた。

二人は間もなく、向う岸にはいあがつて逃げる気配がしたが、後の二人はもぐったまま。お巡りさんは犯人の捜査隊から、いきなり人命救助隊に早変わり。若い方のアパッチは十数分後に助け上げられたが、泳ぎを知らなかったせい、手遅れで絶命。その前夜、尼崎から流れてきたもう一人の老人もまた、翌日死体となって浮上った。今年に入つてすでに五人。昨年三人、一昨年は二人と計十人がこのあたりを墓場になっている。「ここに古鉄のあるかぎり、悲劇は絶えまい」死体を検視したお巡りさんの沈痛な言葉であ

る。

○：アパッチたちは「古銀板」の話でわいていた。さる五月三日朝、ある一団が倉庫の近くから盗みだした六十貫が「古銀板」だったというのだ。城東署員たちにたちまち押収されこそしたものの、ホントとすれば時価約百五十万円のシロモノ。貫あたり四十円相場に下落した古鉄を、ウンウン汗みずくで掘りだし、やつと食いつなぐ彼らにとつて、これは大変な「吉報」だ。またたくまに話は大阪市内から、近畿一円へ、遠く中国地方へ。百世帯、約四百五十人の部落へは無電のキイを打ちかえすような早さで、久しぶりに「流れもの」二、三百人が、どつとくりこんできた。そして九日夜、コンボウ、大八車、リヤカーと部隊構成の犬がかりな波状攻撃をくり返した。警察隊とのみ合い三たび、東署では嚴重な手入れに対する「報復」とみて、機動隊三個小隊はじめ制、私服警察官百八十人を動員するほどの緊張ぶり。だが、その夜以来、アパッチ族の編隊は、肩すかしのように現われない。それも道理、しつこい襲撃は、守衛をやつつけるためでも警察を相手にしたのでもない。銀色にかがやく高価な板へのモウ(妄)執だったのだ。襲撃に失敗したうえ、倉庫には金目のものが残っていないと知ると、流れもののアパッチたちは、さつさと散ってしまったのだ。「一晩にタマゴが飛ぶように売れたのに……」と近く

のタマゴ屋さんはあつという間に消えた。シルバー・ラッシュにガツカリだ。

○…クズ鉄が値を呼んでいたところのことである。造兵廠跡は鉄の山だ」というウワサに、遠くは北海道、沖繩あたりから、腕つぶしの強い、流れものが七、八十人もはいりこんでいた。夜襲、暁の奇襲ともなれば生タマゴを割って出陣の氣勢をあげる。だから、タマゴの売れ行きで「ハン、今晚の「出陣」は何人ぐらい」と勘定できたという。一時は立売りや、飲み屋まで結構商売になった。ドロコンの道も、一にぎりですぶれそうなブラック小屋も星空の下では気にならないのか、夜ごとのうたごえ。町の人に「アパッチ銀座」と呼ばれたのもそのころのことだ。

○…数日前に枚方の旧陸軍火薬庫跡が襲われた。枚方署で捕えたところ一人は大阪のアパッチ族、と聞いた近畿財務局は色を失った。造兵廠跡の倉庫があぶないというので去る十二日、使える工作機械二十八台全部を、こっそり枚方に移したばかりだったのだ。どこから、どうかぎつけたのか。さいわい機械は無事だったが「これじゃどこに疎開しても危ない。早く処分せねば……」と財務局をいままさるのようにあわてさせているそうなの。

『朝日新聞(大阪版)』昭和33年8月1日(夕刊)4版・5面

アパッチ族

——中——

一本の古クギから 開拓者は二人の老婆

○…ここの人たちがこの大阪城東区北中浜町一丁目に住みついて「アパッチ族」とよばれるようになったのは身寄りのないお婆さん二人の「糸」にたぐり寄せられたのが実録だそうだ。その一人は、おきく婆さんといった。小柄な、色の黒い、右足がびっこをひくシャキシヤキした婆さん。人っ子一人寄りつかぬ、造兵廠跡と隣りあわせの殺風景な空地に、ポツンと掘立小屋を建てて住みついたのはもう八年まえ。そこへ家の追いつてをくった男が西鳴野からフラフラあらわれた。「見てみなはれ。土地はなんぼでもあいてまゝ。地代に二千円払ってくればッたらいまからでも…」という婆さんの誘い。こうして、二年たらずの間に、ひとつにぎりのブラック建がニヨキニヨキと、百戸あまり、一つの部落ができあがった。なかには二万円も地代を払わされた人もあったとか。おきく婆さんは部落ができあがったころ、数十万円の金をにぎって姿を消していた。そのあと、ホントの地主——繊維加工業、辰野株式(約七百坪)と石津製薬(約四百坪)が現われてビックリ。工場建設で立退きさわざとなり、辰野は約四十世帯を相手に裁判にもちこんだが、

ドン底に近い人たちが相手の訴訟だけに深刻だ。石津製菓の方の約三十世帯は当分土地を借りうけることで落着いた。あふれ出た一部は隣接の私有地を占拠しているが、この方は管理者がお役所だけにむごい処置もできず、いまのところズルズルべったりである。

○：一昨年の五月ごろ、もう一人のお婆さんが登場する——川をへだてた造兵廠跡へヨモギつみに行つたある日、一本の古クギを拾つた。「もったいないこっちゃ……」そう思つて拾ひ集めた古クギは、意外によい値で売れて暮しの足しになった。「ほとけ様のおみちびき」ヨモギ婆さんはそう信じてせつせとクギ拾ひに通ひだした。両隣の女たちも買ひ物カゴを下げ、川を渡るようになった。女の手内職というわけだ。もちろん守衛さんも問題にしない。造兵廠跡も、部落も三、四カ月は平和だった。

○：ところが、近くの第二寝屋川の護岸工事にきた人夫たちが掘りだした古鉄を持ちだしはじめた。「あれは、ごつい。いけるで……」こんどは男たちがカツとなった。川岸にサクをつくりあわてて年寄りの守衛さん十四、五人が一昼夜交代で監視したが追いつかばこそ、おりからのクズ鉄ブームに乗つて旧造兵廠跡をねらうアパッチ族の集団活躍がはじまつたのだ。当時のもうけ頭はミナミの一流パチンコ店や、料理屋の主人に納まつていると、今でも語り伝

えられているが「ほんとうは五、六十万円ぐらい」とこの草分けは打明ける。

○：「父ちゃん、オレ、きょうけんかしたら、アパッチの子、アパッチの子いうて、バカにしよるねん」こどもが泣いて帰ってきた。成績の良い子は「あいつ、アパッチの子やから委員してもあかん」と仲間外れにされたという。親たちにとつて、この子らの訴えは痛烈だった。日本人八世帯のほかは朝鮮の人。いまでは仕切り屋さん（古鉄仲買人）八件のほか、半数以上は日雇、行商、アイスクリーム売りなどの正業についてはいるのだ。だが……。

印刷業に失敗して神戸からここに転居した仕切り屋さんは「ここはだれも面倒をみてくれぬ弱いもの集まりです。一週間も仕事にあぶれると、もう虫の息。クズ鉄を拾うところが悪いのは知っていたが、どうしようもなかった。だから、あまりエゲツないことだけはすまいと申し合せてきました。昨年五月にいっせい手入れを受けてからは、みな自粛し、当局にも申し入れて半年以上もあの中には入らなかつた。それが、流れものが入ってきて荒し回り、アパッチ族などという汚名をつけられた。絶対あの中に立ち入らぬよう、新たに申し合せをしたほどのに……」と嘆く。ある住人は「盗んだというが女たちがたいい一メートルぐらいも土を掘つて、出てきたものをもちかえつたのが多いので

す。『襲撃事件』にはここに住みついたものは加わっていません。公園にするといって整地されたあとでも地下一、二メートルのところにはまだいくらも古鉄があるはずですよ。どうせあのまま捨てるのなら、われわれに掘らせてくれたらな」とこぼす。クズ鉄がなければ食えない人たちも、たしかに居るのだ。

『朝日新聞(大阪版)』昭和33年8月2日(夕刊)4版・5面

アパッチ族

——下——

忘れたころ払い下げ 夢か……まことか、古銀板。

○…大阪西淀川区のある業者が近畿財務局の管理しているセーバー、ミールリングなど、工作機械を下見に行った。国有財産の機械で使えるものは、中小業者の古い機械と交換できるけっこうな法律「国有財産特別措置法」があるというので、さっそくほしい機械を申請した。ところが、その後いっこうに音さたなし。二年もたってもう忘れたころ、申請書を正式に出せといってきた。この申請書類がまたうるさい。写真までとって十五、六通、これをそろえるだけで一カ月はかかった。そのあと大阪府商工部の書類審査と認定に一カ月。財務局に書類が移ってから交換に差出す機械の評価でまた一服。やっと払下げにきまったのは半年

あと。はじめ申請をだしてから実に二年半目である。「ああ、おかれては時代が変わってしまった、あんまり役にたちまへん。なれぬ町工場の連中は書類つくりの段で、あきらめてますよ。係の話じゃ、ハンコだけでも、三十個ぐらいいるそうで、そのひとつが平均一週間、書類パスに半年以上かかるのは当たり前ですがな」お百度ふんだある業者のきつい批判である。

○…「なにをするにも予算がなく、人手不足のうえにすべてが規則ずくめ。まったく民間のようにスムーズには行かないので」と財務局は正直に語る。こうした調子で、造兵廠跡をあらかた片づけるのに五年かかった。まだ大阪市公園予定地の一部や第二施工場地区など約八万坪のほか、埋没分は除き地上に現われている古鉄だけで二〇〇、工作機械二十八台が残っている。こんな調子のお役所仕事では、馬力をかけても今年いっぱいはかろう。ここには一昼夜交代でつめる守衛さんが臨時雇いを含めて三十人。その平均年齢が五十歳。これで十二万坪を守ってゆかねばならぬのだ。今ねらわれているのは、城東線をこえて、鉄骨の残る「第二施工場」である。

○…それにしてもアパッチの逆襲とさわがれた先日のシールバーラッシュの本体、ナゾの「古銀板」は、単なるアパッチ族の夢だったのだろうか……。部落のある代表者

は「わたしはほんものの銀板だと思いません、大砲のタマの底に使ったんやいいませ。タテ一寸、ヨコ一尺の箱にズツシリ。箱の表に古銀板五十*入り」と書いてあったそうです。流れもののアパッチが倉庫の近くに摘んであったのを見つけて盗み出したんです。六十貫（時価百五十万円）はあったそうだ。なんでも古銀板は役所の帳簿にはのってなく、盗まれたあとでビツクリして「鋼材」ということにしたと聞いています」と力説する。

被害記録書をくってみながら某守衛さんも話す。「一回目は五月三日に古銀板を六十貫以上盗まれたが、城東署に急報して約四十貫だけ、ドンゴロス二俵に入れられてもどってきました。その四十貫も、六月十日にまた盗まれた。こゝんどは犯人がわからんので、どうにもなりまへん」

城東署藤井係長や西川刑事の話はこうだ。「急報ですぐ出かけた。四十貫くらいだったろうか、古銀板を押収して、その翌日か、二、三日後に財務局に返した。そのとき守衛室では古銀板があったのさえ知らなかったといって、びっくりしていた。そのほかにも、古銀板があるのかどうか、倉庫のどこにあるのか調べるといっていた。万事そんなふうだからね。とり返してやった四十貫も、またすぐ盗まれたといってきたが……」

ところで、管理の直接責任を負う近畿財務局小西分室長

は「古銀板なんてものにはありません。城東署ではなにも知らずに古銀板などと勝手にいっているけれども、あれはうちでの鑑定ではたんなる銅板ですよ。さあ盗まれたのは二十貫ぐらいのもんですか」と打消し同財務局磯部管財部次長も「そんなものがあつたんですか。それほど高価なものであれば当然報告があるはずだが……」と頭から問題にしない。

銀なのか、銅なのか？地下に眠る資源はあといくら？帳簿づらは「ゼロ」というが？ちよつとした夏向きのスリラーではありませんか。

(おわり)

(注) 向井 敏『開高健 青春の闇』

平成四年二月 文藝春秋